

いわゆる国際英語について

飯 島 周

1. 現在地球上に数千種ある人類の言語のなかで、その地理的分布と使用者数から見て最大とされるのは、もちろん英語である。英語の発展はしばしばラテン語の場合と比較されるが、Pax Romana を出発点としてヨーロッパの中世で世界語と見なされたラテン語の版図をはるかに超えており、Pax Britanica および Pax Americana によって、まさに地球を代表する言語となっている。McCrum et al (1986)にも述べられている通り、宇宙へ旅立つ Voyager 号に積まれた異星人への代表メッセージに英語が使われたのは、その象徴的事実である。具体的な最近の統計、たとえば Crystal (1987)によれば、母語の立場から見ると、英語を母語とする人の数は約3億5千万で第2位だが、公用語とする人の数は約14億で、2位の中国語使用者数10億に大きく差をつけている。しかも、中国語が比較的限定された地域に集中しているのに対して、英語は全世界的な分布を持つし、英語を公用語としない地域、たとえば日本などでも、学校教育での主要な授業科目となっていることを考えれば、さらに明らかな開きがある。他の言語との差は言うまでもない。

2. ただし、当然ながら、世界各地の英語は、発音・語彙・文法の各面でかなりな相違を見せている。そこで、このような現状を反映し、英語はもはや本来の英語圏、たとえばイギリスやアメリカだけのものではなく、全世界的な人類の文化的財産であるという認識のもとに、英語の分類にも新しい考え方が用いられるようになった。

その代表例は、イギリスを中心とする学者たちの方法である。すなわち、世界の国々または民族について、3種の英語を区別する。第1は英語を生来語(Native Language)、つまり第1言語とする国や地域内、た

たとえばイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、南アフリカ等の英語で、ENLと略して示される。次は英語と異なる第1言語を持ちながら英語を第2言語(Second Language)、多くは公用語とする場合で、インド、フィリピン、アフリカの旧英領植民地、カリブ海地域等がそれに属し、ESLと略記する。——ただし、Second Languageという用語は、アメリカではここでの意味と異なって、個人の場合に使うことが多いようである。すなわち、日本語的な表現である第1外国語は、第2の言語、Second Languageに相当する。——最後は英語を外国語(Foreign Language)とする状態で、ヨーロッパの非英語圏、アラブ諸国、中南米の大部分、中国、日本等がそれに該当し、EFLと表示することができる。

以上の諸地域における英語は、その社会的機能の点で異なっている。ENLの地域では、最も日常的な部分から最高度の精神活動に至るまで、生活のすべての面で英語が用いられている。ESLの地域では、日常的なやりとり、たとえば家族や部族間では英語以外の第1言語を用いるが、広範囲のコミュニケーションや公的な場面では英語が共通語となり、学校教育や行政関係では必須のものとなる。EFLの地域では、その地域内で生活する限り、英語を用いなくても支障はなく、非常に高度な文化活動も可能である。ただし、日本のような国では、英語は進学のための重要科目とされ、高学歴を得るためにはほとんど必修科目として学ばなければならない。

3. さらに、国際的なコミュニケーションでは英語の通用度や利用度が最も高いことは言うまでもなく、この点でも英語学習の重要性が認められる。それは単なる観光や娯楽、航空管制のような面ばかりでなく、政治・経済や文化交流の高度な次元にも言えることである。たとえば、1987年8月に東ベルリンのフンボルト大学を中心に開かれた第14回国際言語学会議で、各部会における世界各地からの研究発表は合計1,000あまりだったが、その約半数は英語で、残りが独・仏・露のいずれかであり、また、全体会議の報告19のうち、実に14までが英語であった。それらの英語が、使用者の背景言語と関連してかなり多様であるのは特に印

象的だった。

この多様性は、British English や American English など ENL はもちろん、ESL や EFL の場合でも、Indian English や West African English など、民族や地域と結びつけた名称で表現されることがある。しかし、それぞれの背景言語による複雑性は、単純化した表現では十分に示せないことが多く、その分類はさらに細かくなって行く。同時に、名称も不統一になる傾向がある。たとえば日本風の英語については、Japanese English のほか、Janglish, Japlish があり、渡辺 (1983) のように Japalish を用いる少数派もある。もちろん、*cuffs button* や *one man car* の類を、Haward (1984) が記すように *the Japanese dialect of English* (p. 80) と呼んでよいかどうかは明確でない。ただ、日本風の英語表現が、国際的なコミュニケーションの場合、誤解を生む可能性は大きい。実はこれはすべての種類の英語について言えることである。

さらに民族性による ENL 内部の細分化も可能で、それは Black English や Yinglish などで示される。前者は言うまでもなく黒人系の英語であり、地域的と言うより社会的で、これに関する研究も数多い。後者はイディッシュ語 (Yiddish=独語 *jüdisch*)、つまりユダヤ系でアシュケナージム (Ashkenazim 複) と呼ばれる人たちの使う言語の影響を受けた英語である。前述の Haward (1984) によれば、Yinglish は B. Malamud や Ph. Roth などの有名作家のおかげで定着し、英語全体のなかで “*liveliest dialect*” (p. 71) だと言う。この両者以外にも Hispanic English や Polish English など、多くの民族性を持つ変種が認められている。

4. 近年における英語の研究は、そのような多様性を重要視するようになって来た。つまり、伝統的な ENL だけを対象にするのではなく、ESL や、場合によっては EFL をも視野に入れて考えようとする方向が明らかである。これをさらに進めて行くと、最近特に目立つ、英語を基礎とするピジン語 (Pidgin) やクレオール語 (Creole) の研究となるが、これは英語という言語体系について従来と異なる考え方、又は英語のカレオン現象の確認を示すものとなった。

ピジンは、いわば一時的な共通語であるが、クレオールは母語、つまり世代から世代へと受けつがれるような状態のものを指す。これらは、かつては一人前の言語とは見なされなかった。しかし、最近ではそのような間に合せのピジン、少なくともクレオールが、実はそれなりに独立した体系を持つのだという認識が一般化している。この傾向は、しばしば社会言語学と呼ばれる学科や新言語の誕生の研究と関係づけられるが、より根源的な問題として、たとえば安部公房「異文化の遭遇 下 クレオール」(『朝日新聞』1987年1月8日夕刊)のように、クレオールの形成過程をミュータント語の発明、遺伝子レベルにプログラムされた生得的な言語能力の存在の証明、言語のバイオ・プログラム説の実証と考える立場さえあるのは興味深い。

このような研究態度が、国際的な英語教育と関連して、ある程度の影響を与え始めているのは当然である。国際英語という概念も、それと関係する。この概念はやや漠然としているが、ENL、ESL、EFLに関係なく、国際的コミュニケーションに用いられる英語を指す。

5. 伝統的な国際的英語教育は、ENLを中心として、そのモデルを教授することであったと言える。モデルの代表は、いわゆるイギリス英語(特に標準英語 Standard English=SEと呼ばれるもの)か、アメリカ英語(特に General American=GAと呼ばれるもの)である。両者の相違は歴史的なもので、その体系の各レベル、すなわち発音・語彙・文法のすべての面に見られるが、特に発音面で強調されることが多く、たとえば日本の英語辞書のほとんどは英音・米音を対照して記述している。そのような差はあるものの、標準モデルの権威がいわば絶対視され、ごく狭い範囲のモデル以外は、ほとんど軽視又は無視されて来た。

しかし、現代世界における英語の多様性の認識が深まると共に、モデルについての考え方も変り、特に標準のとらえ方が文体論的な幅を持つようになり、SEも方言の一種なのだと明確に説明される傾向が出て来た。たとえば Stubbs (1986) には次の記述がある。

... SE is a dialect, and like any other dialect it has internal stylistic variation. ... Thus the following sentences are all SE :

1. I have not seen any of those children.
2. I haven't seen any of those kids.
3. I haven't seen any of those bloody kids.

... The following sentence is not SE, however :

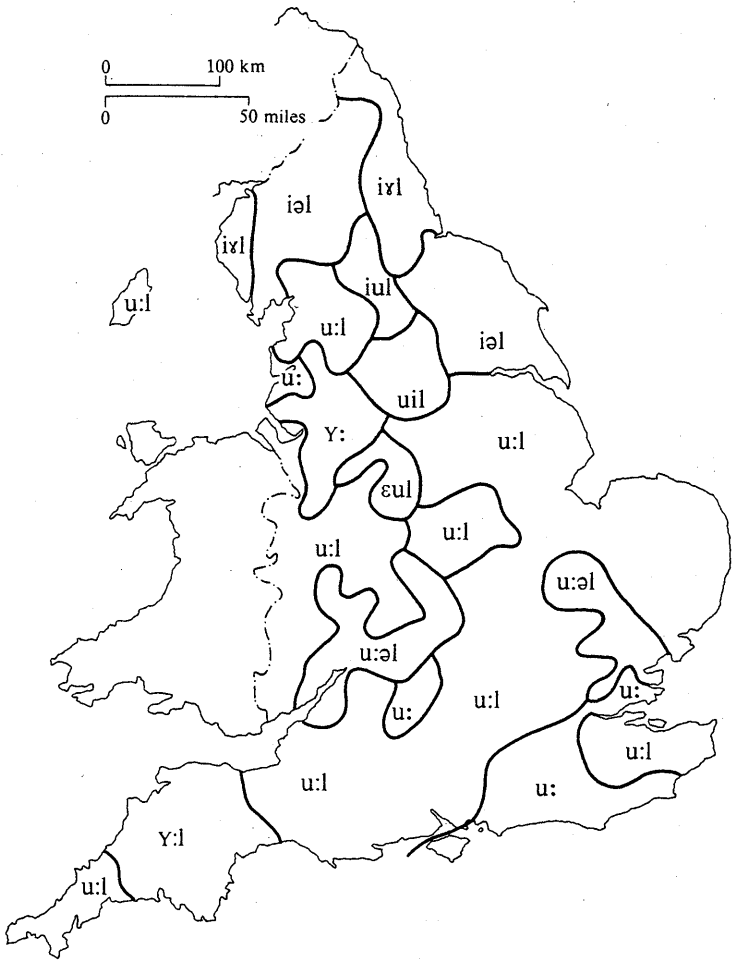
4. I ain't seen none of them kids.

It is not incorrect SE ; it is simply not SE at all ... (p. 87)

もちろん、1.が最も形式ばった文体で、2.3.はくだけた文体であり、1.2.3.のすべてを同等に扱うことには抵抗があろう。たとえば *haven't* の短縮形は場合によっては不適當とされ、*kids* や *bloody* は俗語的であり、特に後者は *bl—* という伏字の形で示されることさえある。しかし、1.2.3.は統一的な体系を持っており、4.とは決定的に異なる。4.の *ain't* という形式や、二重否定による否定の強調、さらに代名詞 *them* の変則用法は1.2.3.の体系内には存在しない。そこで、上記のように、4.は“正しくないSE”ではなく、異なる体系を持つ英語なのである。このような考え方に立てば、SEの学習の場合には、他種の英語との体系的差異を認識すると同時に、SE内部における文体論的な差にも注意しなければならない。

6. しかも、イギリスにおけるSEについての基本的な考え方によれば、発音の面でもうひとつの重要な問題がある。たとえば Trudgill (1983) はこの点について次のように要約している。

... Standard English is also unusual in that it is spoken with a large number of different accents. ... Most speakers of the (more or less regionless) Standard English dialect, however, speak it with a (usually not too localized) regional accent, so that most educated people betray their geographical origins much more in



School の発音分布図
 (Trudgill (1983) p. 37による)

their pronunciation than in their grammar or lexis. (p. 187)

つまり、発音における規範は非常にゆるやかである。または SE の体系は文法と語彙を中心とするもので、発音は別物だと考えられている。もっとも、日本語についても似たような事情がある。最近の日本語学では一般に“標準語”と呼ぶのを避けて“共通語”という術語を用いる傾向があるが、共通語の発音については、一部の放送関係の場合を除いて明確なモデルがないように思われる。“標準アクセント”という用語はあっても、文法と語彙が問題で、一般には、発音上の差異を共通語の主要判定基準とはしていない点で、SE の場合と共通性を持つ。

ただし、イギリスでは、SE をいわゆる認容発音 (Received Pronunciation=RP) の体系で発音するのが標準的とされ、それが国際的なイギリス英語学習のモデルとされている。RP はイギリス国内の地方性とは無関係で、むしろ一種の階級性を持ち、イギリス独自のエリート教育組織である Public School や英国放送協会 (BBC) と結びついている。RP に関する Trudgill & Hannah (1985²) の報告 (p. 9) によれば、RP は完全にイギリスのイングランド地方に属する方言的発音であって、しかもイングランドの人口の 3% から 5% の人々の発音にすぎないと言う。従って RP を絶対視することには問題もあり、気取った階級の発音としての否定的評価も聞かれる。

それでも、イギリス各地の方言の多様な発音は、外国人学習者にとってはまことに不都合である。たとえば、*school* という簡単な単語の発音さえ、H. Orton その他の方言調査によれば、イギリス各地で語頭の 2 子音 SK-を除き、次の 10 通りに別れている。(School の発音分布図参照)

- (1) u : l (2) u : əl (3) uil (4) ʏ : l
(5) iul (6) iəl (7) iyɪl (8) εul
(9) u : (10) ʏl :

そこで、イギリス各地のこのように多様な発音のなかでは RP が最も通用度が高いという事実から見て、少なくともイギリス英語の標準的教育の立場で RP をその中心に据えることには妥当性がある。——もっとも、RP 内部にも発音上の幅があることに十分注意しなければならない。——どんな言語体系についても、ある種の規範性は常に存在するもので、その規範性があるがゆえにその体系の確認が可能になる。

この意味での規範性は、片寄った悪名高い規範主義 (Prescriptivism) におちいる危険性がないわけではない。しかも、ある種の一般的規範意識は常に存在する。たとえば、前述の国際言語学会議の最後に、議長であるロンドン大学の R.H. Robins 教授が挨拶したが、典型的な SE と RP で、閉会后筆者と意見を交換したあるアメリカ人学者は「あれこそ本物の英語だ、*the English* だ」と絶賛していた。また、同会議中のひとつの全体会議で、ソ連の学者による英語の報告があったが、たまたま筆者と隣り合った某国の英語学者は、ソ連学者の発音と語法について小声ながら終始訂正し続け、時には筆者に同意を求めるので、わずらわしい感じさえあった。——もちろん報告の内容自体は、十分に評価すべきものである。——以上の例は、上述の規範意識が言語についての専門家の間にも明確に存在し、さまざまな判定の基準として活用されていることの証明となろう。

7. 上述のように、国際的英語教育における SE および RP、アメリカ英語については GA、の重要性は否定しがたいが、同時に他の種の英語の持つ意味も軽く見てはならないし、SE か GA か、どちらかを国際英語のモデルにすることは民族意識の上で問題を生ずることもある。この点で、Quirk (1982) はひとつの重要な提案をしている。すなわち、ESL および EFL など、特に国際的な立場での英語学習の標準モデルとして、特定の民族や国家に片寄せらぬ中核英語 (Nuclear English = Nuc E) と呼ばれる英語の体系を開発すべきだという主張である。これは、国際的英語教育についての多年の経験から生じた意見で、すでに世界語となった英語が、偏狭な国家主義から離れて行くべき方向を示唆している。

この考え方はすでに1970年代からあらわれ、Quirk et al (1972) にも部分的に取り上げられているが、当時は SE と GA などのほか、各種の英語にこだわらぬ共通の中核部分 (Common Core) の採用であった。しかし、その後の研究の発展と共に、ESL からさらに進んで、諸種の新英語 (New Englishes = New E) という概念と用語が確立され、ENL を中心とする諸種の旧英語 (Older Englishes) と対比されるようになった。いわゆるクレオール以後言語連続体 (Post-Creole Speech Continuum) から生じた世界各地の New E が、ある種の共通性を示していることは、Platt et al (1984) などで明らかにされている。このような事態が Nuc E の開発という発想を生んだものと推測される。

8. Nuc E の概念は、かつての Basic English や近年の Plain English とは異なったものである。Basic English の *Basic* は、'British American Scientific International Commercial' の頭文字語 (Acronym) で、1930年代から40年代に注目され、当時の英米の政治家たち、たとえば W. Churchill や F.D. Roosevelt に支持されたこともあるが、わずか850語という語彙数の制限が強すぎ、修得には便利だが文章を書くのには実際的でないとされ、現在ではほぼ歴史的存在になっている。Plain English は1970年代後半から、特に強力に提唱されているもので、政治・経済その他各方面での権威づけられた難解語、いわゆる *gobbledegook* を撲滅し、平易な話し方書き方を広めて、一般的なコミュニケーションを容易にし、それにとまなう経費の削減さえ可能にしようとする運動と結びついている。従って、一般には Plain English Movement または Plain English Campaign という形で用いられ、英米両国政府の積極的支持を受けて、各種の賞さえも設定され、難解で近づきがたい公文書や契約書その他の専門事項の説明文の平易化の点で成果が認められている。ただ、Plain English そのものについては、読解性 (Readability) や文面構成 (Design) について一応の指標はあるものの、短かい平易な語や短文をすすめ、耳で聞いてもわかるような書き方をせよという程度で、実体については経験や直観によらざるを得ない部分がある。そして、何よりも ENL を主要

な対象とする点で、国際的な英語学習との関係は間接的になる。

9. 一方 Nuc E の主目的は、前述のように、SE や GA にかわる国際英語学習のモデルとなることであり、これに関する最近の代表的見解は Crystal (1987) に次のように示されている。

... One proposal, made by the British linguist Randolph Quirk (1920-), argues that the problem of variety would be avoided if the language were specially adopted to produce a 'nuclear' English for international use. 'Nuclear English' would provide a core of structure and vocabulary from within the range of acceptable English ... (p. 358)

もちろん、Quirk (1982) その他には具体的な Nuc E として、次のような趣旨の提案がある。すなわち、Nuc E の用例は、一般的には、コミュニケーションの核 (Communicative Nucleus) となるような、語彙と文法の面で義務的な最小限 (Obligatory Minimum) の表現に限定する。たとえば、法性の点で複雑な意味を持ち、多義的な解釈を許す危険性のある *can*, *may* などは、状況に応じて *be able to*, *be allowed to* などに置きかえて明確な意味にする。また、肯定・否定だけでなく主語と動詞の一致の面で複雑すぎると思われる付加疑問 (Tag Question) はできるだけ単純化し、肯定はすべて *is that so?*、否定は *isn't that right?* などとする。——これと似た方式は他の言語にも見られる。*n'est ce pas?* (仏)、*nicht wahr?* (独)、「(そうです)ね」(日)など参照。——その他、二重目的語の構文を避けるなど多くの具体例があるが、原則的には 'a subset of the properties of natural English' の状態を守る、すなわち national ではないが natural であることを目標とする。このような Nuc E は、いわゆる国際標準英語として、英語の学習をより容易にする可能性を持つであろう。——1986年9月の日英協会主催秩父宮妃基金第1回講演会での Quirk 教授の講演 ("In a Manner of Speaking") は、Plain English

Movement と Nuc E の両方に触れる点があり、講演後の応答の中でもその主張の一部が述べられた。——

10. しかし、Nuc E の具体的材料を供給する acceptable English の範囲をどこまで認めるかが問題である。SE や GA のみにするか、ENL ならよいのか、または ESL まで広げるか、議論の別れる所であろう。現実に Tag Question の単純化などは New E の一部で体系化しているし、もし前述のように、クレオール的構造がパイオ・プログラムそのものに直結するとすれば、意識的にそのような体系を作るのが得策とも考えられる。たとえばガイアナクレオール語 (Guyanese Creole) の文例、*Mi go bai buk.* (Me go buy book = I shall buy a book or books) と類似の構造が数多くのピジンやクレオールに見出され、一種の自然的普遍性を感ぜさせる。

もちろんピジンやクレオールは英語と関係するものばかりではない。しかし、たとえば Valdman (1977) にあげられている全世界のピジンおよびクレオール127種では、仏語系15、ポルトガル語系14、スペイン語系7、他の(英語を除く)ヨーロッパ語系19、非ヨーロッパ語系37と比較して、英語系は35になり、質量ともに最有力である。——もっとも、その35のなかには、アメリカ軍占領時代の浜松地域で Bamboo English と呼ばれた Japanese Pidgin English も含まれていて、多少問題があるかも知れない。——

いずれにせよ、国際英語としての Nuc E 的な言語体系は、基本的屈折をさらに単純化させ、一層分析的なタイプになることが予測される。現に ENL の場合でも、*I wants it* や *He give it me yesterday* などの表現が (SE ではないにしても) 方言形として存在し、一部の ESL では標準形とさえなっている。分析的タイプの言語、たとえば中国語は、ある時代には屈折タイプよりも低い発展段階にあると見られたが、それが誤りであることは自明であり、むしろ記号性の点ですぐれた所があるとも考えられる。

11. ただし、Burchfield (1985) や Quirk et al (1986) などが予見す

るように、国際英語と見なされるものは、将来2極に分裂して行くであろう。すなわち、Nuc Eのめざす統一的方向に進むか、SEとGAを中心的モデルとする地域的変種 (Local Varieties) への細分化かどちらかである。より具体的に言えば、英語はさらに地球上での使用範囲を広げ、世界各地のリンガ・フランカ (Lingua Franca) となり、さらに定着してクレオール化し、つまり母語として世代的連続を形成し、ますます多様化する可能性がある。これはラテン語の歴史が示す通りである。

他のあらゆる文化的現象と同様に、言語にも普遍性に向う力と特殊性を求める力、いわばある種の求心力と遠心力がはたらき、それが活性を与えることになる。その結果、世界の各国が英語によって統一 (unite) される道を歩もうとするなら、同時に——Oscar Wilde 流に言えば——英語によって分割 (divide) される危険性を常にはらんでいると言えよう。

〈参考文献〉

- Burchfield, R. (1985) *The English Language*. Oxford Univ. Press.
Crystal, D. (1987) *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge Univ. Press.
Haward, P. (1984) *The State of Language*. Hamish Hamilton.
McCrum, R. et al. (1986) *The Story of English* Faber & Faber. BBC Publications.
Platt, J. et al. (1984) *The New Englishes*. Routledge & Kegan Paul.
Quirk, R. (1982) "International communication and the concept of Nuclear English." R. Quirk, *Style and Communication in the English Language*, Edward Arnold, pp. 37-53.
Quirk, R. et al. (1972) *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
Quirk, R. et al. (1986) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
Stubbs, M. (1986) *Educational Linguistics*. Basil Blackwell.
Trudgill, P. (1983) *On Dialect Social and Geographical Perspective*. Basil Blackwell.
Trudgill, P. & Hannah, J. (1985²) *International English A Guide to Varieties of Standard English*. Edward Arnold.
Valdman, A. (ed.) (1977) *Pidgin and Creole Linguistics*. Indiana Univ. Press.
渡辺武達 (1983) 『ジャパバリッシュのすすめ 日本人の国際英語』朝日新聞社。